



簡易保険融資で建設される春日団地

郵便局の簡易保険は留萌の街づくりにも協力

郵便局の簡易保険は、皆さんの払い込まれる保険料が、留萌の街づくりに役立っていることをご存知でしょうか。

公営住宅の建設、道路の整備、港湾、都市計画そして教育施設の拡充など、多くの事業に5億円も貸し出されています。

簡易保険は、あなたの幸福を守る三つの柱から成立しています。
/ 万一の場合の生活保障に
/ 老後の準備、お子さんの教育、結婚資金に
/ 不慮の災害による傷害保障に

また、局では、生活プランに合せて、養老保険、長生きの保険、家族保険、クローバー保険などいろいろな加入制度があります。

この簡易保険に加入することはあなたの万一に備えるとともに、私たち留萌の街づくりを進めることにもつながります。
信頼のある郵便局の簡易保険です、あなたもご加入ください



古丹浜貯木場は8万平方メートルを造成、臨海道路や陸上貯木場の造成が行なわれる(古丹浜貯木場地区)

道北随一の漁港基地を旨とする東岸船溜りは、44年から着手され、いよいよことしから掘込み作業にかかる。漁船専用船溜りの完成とともに、商港留萌として、道北随一の港湾整備は着々と進む。

(東岸船溜りとなる船場町地区)



まず、開発建設部によって行なわれている南防波堤延長工事①は四六五メートル、北防波堤四四四メートルを延長②南防波堤に港湾施設用地一万三千平方メートル③四八〇〇平方メートル防波堤百二十メートル、古丹浜貯木場に北埠頭用地二万平方メートル④物揚場百二十メートル⑤を、また塩見臨海造成地に継

南防波堤は四六五メートル延長

また、古丹浜貯木場は、三年計画で八万平方メートルを造成、防波堤の築設、物揚場の造成をはじめ、臨海道路や陸上貯木場の造成も行なわれます。
では、昭和四十七年から五十年度の施行予定、そのあらましをお伝えしましょう。
貨物の取り扱ひ量増加とともに大型化する船舶に合わせ、一万五千トン級の大型船が接岸できるような北埠頭を造成し、水深10メートル岸壁一バースを建設します。
では、この大量の貨物を取り扱う港はどう変わってくるでしょうか



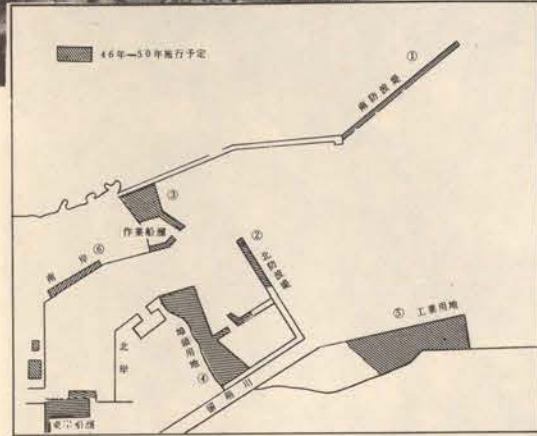
タンク群の林立により一段と商業港としての様相をととのえてきました。



△空から見た現在の留萌港周辺

坂の多い留萌、千望台から港を見おろすと、グリーンと日本海に向かって力強く伸びる防波堤、円い輪が見える……あそこが石油基地……港のようすが、グングン変わっていることがわかります。

道北随一、海の玄関口—留萌港の発展は、とりもなおさず留萌の繁栄につながり、ことしも、ツチ音高く整備が進みます。



道北随一の商業貿易港として、留萌港の重要性は、道央各市に認識されてきました。
ここ数年のうちに、セメントタンクが、そして石油タンクが林立し、その様相は、大きく変わりつつあります。
昭和五十五年には、取り扱ひ貨物量も五百四十万トンと推定、その整備は着々と進められています。留萌港の起工は明治二年にさかのぼります。
「留萌は、天塩国(現在の留萌支庁)と石狩国(空知・石狩支庁)の北部を勢力圏として、海陸連絡上からみて、中部北海道の貨物吞吐港として重要な位置にある。しかし、港形不完全なため、西北の強風には港内があれ、確実な連絡をすることができず、発展上障害となり、貨物はほとんど小樽港を経由し、運賃が無駄となるなど不利な点が少なくない」これは道第一期拓殖計画事業報告文に記された留萌港修築の理由です。
当初、南北防波堤の築設、留萌川の切り替えによる内港築造など大正十年まで、十二ヶ年継続事業として、明治四十三年、築港工事のスタートを切り、昭和八年三月、近代港湾「留萌港」の現在の沿革が誕生した。
以来、留萌港は石炭積出港としての役割をはたす基礎が固まったのです。
戦後、昭和三十一年から南岸雑貨岸壁改修をはじめ、三十八年には南岸雑貨岸壁七ヶ、延長三七五メートル、南岸物揚場四ヶ、延長一七七メートルが完成され、その後四十年には

55年には取扱量五百四十万トン想定

一号上屋が完成しました。こうして、留萌港は、道西北部における商業港として、ますます発展する背後地帯の輸送需要とともに、昭和五十年を目途に、長期港湾整備計画(総金額六十二億七千万円、推定貨物量三十七万トン)を立案、計画にそった整備が進められてきた。
また、取扱ひ貨物も、従来は石炭一本に頼ってきたが石炭産業の斜陽化とともに代って石油、セメント、木材など、の取扱量がふえその様相も時代即応して大きく変わってきました。
留萌港の第一次整備五ヶ年計画が始まったのは、三十六年から、この間投入された予算は、国、道、市を含め三十五億円(四十五年度分も含め)にのぼります。
五十五年、取り扱ひ量も五百四十万トンと現在(昨年二百七十万トン)の倍量を想定、これに対応する施設づくりが着々と進められています。
また、四十七年完成を目標に進められてきた東岸船溜りは、移転などの業務を終えて、いよいよ造成工事が進められます。
この東岸船溜りは(元新北海道造船船あと)三万二千平方メートルを掘り込み、漁船専用の船溜りが完成されると百二十トンの漁船が、十五、六隻はけい留できます。
また、背後には物揚場、漁業専用施設が整備されます。

ひらけゆく留萌港

道北の門戸として整備進む